第四章　宇治の姉妹の物語　歳末の宇治の姫君たち

［第一段　歳末の宇治の姫君たち］

雪霰降りしくころは（雪やアラレが降り頻る頃は）、いづくもかくこそはある風の音なれど（どこでもこのように荒れ吹く風の音ながら）、今はじめて思ひ入りたらむ山住みの心地したまふ（姫君たちは今初めて思い知った山暮らしの厳しさという気分でいらっしゃいます）。

女ばらなど（女房たちなどは）、

「あはれ（ああ宮様がいらっしゃらないのに）、年は替はりなむとす（年は替わるんですねえ）。心細く悲しきことを（心細く悲しいことです）。改まるべき春待ち出でてしがな（春には良いことがあってほしいものです）」

と、心を消たず言ふもあり（と意気消沈もせずに言う者もいます）。「難きことかな（何も変わらないでしょう）」と聞きたまふ（と姫君はお聞きになります）。

向かひの山にも（向かい山の寺にしても）、時々の御念仏に籠もりたまひしゆゑこそ（故父宮が季節毎の念仏行にお籠もりなさったことで）、人も参り通ひしか（寺僧も供養に参り通って来ていたが）、阿闍梨も（懇意だった阿闍梨も）、いかがと（如何お過ごしですかと）、おほかたにまれに訪れきこゆれど（通り一遍の挨拶は稀に見舞いを遣し申すが）、今は何しにかはほのめき参らむ（今は話し相手もいないとまったく参上申しません）。

いとど人目の絶え果つるも（主人の八宮が亡くなったので山荘に、すっかり人気の絶え果てるのも）、さるべきことと思ひながら（当然の事と思いながら）、いと悲しくなむ（それは寂しいものです）。何とも見ざりし山賤も（出入りしていても、特に気にも留めなかった村人も）、おはしまさでのち（八宮が亡くなってからは）、たまさかにさしのぞき参るは（たまに顔を見せる者がいると）、めづらしく思ほえたまふ（姫君には懐かしく思えなさいます）。このころのこととて（寒さも厳しいこの頃のことだからと）、薪、木の実拾ひて参る山人どもあり（薪や木の実を拾って来てくれる村人もいました）。

阿闍梨の*室より（阿闍梨の僧房から）、炭などやうのものたてまつるとて（炭などの越冬物資を姫君たちにお贈り申し上げるとして）、　*「室（むろ）」は一般には＜密閉空間＝倉庫、物置＞のことだろうが、古語辞典には＜僧の住居。僧房。＞ともあり、どういう語用か分かり難いが、もしかすると、寺の室で作った炭を阿闍梨の配慮で山荘に送った物、なのかも知れない。

「年ごろにならひはべりにける宮仕への（長年お近づき申し上げてまいりました宮様への御奉仕が）、今とて絶えはつらむが（今年で終わってしまいますことが）、心細さになむ（寂しく思われます）」と聞こえたり（と寒中見舞いがありました）。

かならず（必ず毎年）冬籠もる山風ふせぎつべき綿衣など*遣はししを（冬籠り用の山風を防げる綿衣などを八宮は山寺にお与えなさっていたことを）、思し出でてやりたまふ（姫君は思いだし

て今回も返礼に贈りなさいます)。　*「遣はしし」の主語は八宮。「遣はす」は「遣ひ」を指示する、という言い方で＜お与えになる＞という意味の尊敬語になるようだ。単なる使役動詞に見えて、少し分かり難い。

法師ばら、童べなどの上り行くも(遣いの法師たちや見習い小僧などが荷を背負って山道を上り行くのも)、*見えみ見えずみ(見え隠れする)、*いと雪深きを(とても雪深い光景を)、泣く泣く*立ち出でて見送りたまふ(姫君たちは泣く泣く外に立って出て見送りなさいます)。　*「見えみ見えずみ」は＜見えたり見なかったり→見え隠れして＞。　*「いと雪深きを」は下にある歌から逆推すると、庭の松原越しに見える光景のような気がするが、何故かそういうことは一切書かれておらず、このままでは全体の光景としか読めない。　*「立ち出づ(たちいづ)」は＜立って外に出る。＞とか＜表面に出る。現れてくる。＞とか大辞泉にあるが、実際に姫君たちが何処まで出たのかは分からない。

「*御髪など下ろいたまうてける(父宮が出家なさっていらしたとして)、さる方にておはしまさましかば(私たちとは別居していても、そのように本意を適えた念仏三昧の暮らしによって今も長寿で生きていらっっしゃったとしたなら)、かやうに通ひ参る人も(このように寺と山荘を行き来する遣いの人も)、おのづからしげからまし(自然と多かったことでしょう)」　*「みぐしなどおろいたまうてける」は「髪を下ろす」が＜出家する＞なので＜出家なさっていらした＞だが、「さる方にて」と是を一旦客観視して確認する意図は、姫が自らを落ち着かせる為かと思われ、それは自分たちが父宮の出家を邪魔したかの罪悪感を覚えているという不安を示しているのだろう。何れ、「さる方にて」は言い換えなので、この文は「御髪など下ろいたまうて(ける、さる方にて)おはしまさましかば」という過去仮定文型が本文であり、「ける、さる方にて」は＜～として、そのような形で＞という挿入句構文となっている。で、「さる方」という言い方に込められた思いだが、出家は八宮の本意だったわけであり、その修行生活なら功徳があって長生き出来ただろう、みたいな見込みというか期待というか願望というかが前提認識にあって、出家していれば今でも八宮は「おはします」可能性があったと姫は考えているように見える。とまぁ、ずいぶんと読者にゲタを預けられた感が強いが、是等を明示補語しないと出家の意味が見えて来ない。是が見えて来ないと、八宮が今でも生きていれば人の出入りも多かった筈だ、みたいな言うまでもない当たり前の文意になってしまう。いくら会話文なので場面を見て補語しなければならない、としても、是は少なからずキツ過ぎる難文じゃないだろうか。

「*いかにあはれに心細くとも(出家なさっていたら別居がいくら悲しく心細くても)、あひ見たてまつること絶えてやまましやは(お会い申し上げるのが絶え果ててしまいはしなかったでしょうに)」　*「いかにあはれに」は注に＜以下、父宮が生きていて、山寺に出家した姿ででもいたのであったら、という仮想のもとの詞。＞とある。他に読み様も無さそうなので、別居が心細くても出家すれば父宮は長生き出来ただろう、という文意と取って置くが、出家の意味を知らない所為か、私にはとにかく難文だ。

など、語らひたまふ(などと姫君たちは語らいなさいます)。

「君なくて岩のかけ道絶えしより、松の雪をもなにとかは見る」(和歌 46-13)

「松の雪 岩のかけ道 見え隠れ」(意訳 46-13)

*注に＜大君から中君への贈歌。「君」は父宮、「見る」の主語は中君。「岩のかけ道」は、山荘と山寺を結ぶ桟道。『河海抄』は「世にふれば憂さこそまされ吉野の岩のかけ道踏みならしてむ」(古今集雑下、九五一、読人しらず)

を指摘。＞とある。「いはのかけみち」は＜山の岩壁を縫った険しい道。＞と古語辞典にある。姉姫は昨秋の薫君との別れ際の歌の贈答にも「雲のゐる峰のかけ路を秋霧のいとど隔つるころにもあるかな」(和歌 45-09)と、「岩の懸け道」に似た「峰の懸け路」という語を使っていた。また、参照歌の語感にも「岩」は＜厳しい修行場＞の意が込められていそうだ。斯くして、「君なくて岩のかけ道絶えしより」は＜父宮が亡くなって寺との行き来が亡くなった今＞という歌筋が見えて来る。しかし、この歌で最も分かり難いのは「松の雪」が何を意味するのかだ。「まつ」は「待つ」との掛詞で、生前の八宮が山籠りしていた時に、姫君たちが父宮の帰りを待ちながら庭の松を眺め暮らしていた、ということを下敷きに、「松の雪をもなにとかは見る」は＜宮亡き今の庭の「松の雪」をどういう思いで見ているのか＞とした歌筋のようではあるものの、姫が雪の庭を眺めて松の木に故宮を偲ぶ、という場面が上文に前振りされていないので、「松の雪をもなにとかは見る」が何とも唐突な物言いに聞こえてならない。が、今のところ他に読み様も無さそうなので、そのように解釈して置く。因みに、参照挿絵で姫君が縁側に出て庭越しに山を見ている図柄となっているのが、この解釈の種で、この絵の姫は妹姫ということになりそうだ。

中の宮(姉姫の詠歌に妹姫はこう唱和なさいます)、

「奥山の松葉に積もる雪とだに、消えにし人を思はましかば」(和歌 46-14)

「山の松葉の雪でさえ、解けて消えてもまた積もる」(意訳 46-14)

*注に＜中君の返歌。「松」「雪」の語句を用いる。「雪」「消え」縁語。「思はましかば」反実仮想。『細流抄』は「奥山の松には凍る雪よりも我が身世にふるほどぞはかなき」(伊勢集)「消えやすき露の命にくらぶればげに滞る松の雪かな」(伊勢集)を指摘。雪と同様に思えたらうれしい、雪は消えても再び降り積もるものであるから、しかし、人は一度死ねば再び会えない。＞とある。「松の雪」は＜残り雪＞でもあるようで、冷たく凍る雪でさえ世の無常よりは頼り甲斐があり、まして来冬には再び積もるということで、八宮を雪に準えるという歌筋は、父宮が出家して厳しい修行生活を行なっていても、生きてさえいれば再会出来るという、姫君たちの会話文にも重なる歌意らしい。つまりは、この妹宮の歌の為に、姉宮は「松の雪」と前振りしたようで、であれば尚更、情景描写で松葉越しの雪見が語られていないのが惜しまれる。

*うらやましくぞ、またも降り添ふや(羨ましいほど雪は降り継ぐこと)。　*注に＜『新釈』は「記者の詞」。『評釈』は「中の宮が歌を受けて、そのまま言ったのだ。中の宮の言葉だ、とも解しうる。しかし、その一人の言葉というより、姉妹二人の心と見るほうがよかろう。期せずして二人は、同じ思いをもったのだと。また同時に、これは、語り手の言葉である。いま現実に目に見ながら語る思い、現場からの放送である。すなわち読者の目に雪が見え、この言葉が姉妹の言葉として聞こえるであろう」と注す。＞とある。ということで、渋谷校訂も当文を地文としてあるが、私はやはり是を妹宮の言葉だと思いたい。其に姉姫も語り手も共感し、雪の情景が読者に伝わる、という波状伝播の広がりを感じたい。と、結局は同じ事なので、校訂に従う。

[第二段　薫、歳末に宇治を訪問]

中納言の君(中納言の薫君は)、「*新しき年は、ふとしもえ訪らひきこえざらむ(年明けにはちょっと出掛けられそうもない)」と思しておはしたり(とお思いになって、この年の暮れに山荘にお見えになりました)。　*「新しき年は」は注に＜以下「きこえざらむ」まで、薫の心中。新年早々はいろいろと年中行事が多くて宇治へは行けまい、の意。＞とある。「ふと」は現代語に変わらず＜符と＝不意に、思わず＞らしいが、この「ふとしも」は＜簡単に気安くは＝ちょっと＞くらいの言い方だろう。

雪もいと所狭きに(雪で自由も利かない山道を)、*よろしき人だに見えずなりにたるを(並の身分の者でさえ姿を見せなくなっている山荘に)、*なのめならぬけはひして(並々ならぬ貴人然とした従者仕立てで)、軽らかにものしたまへる心ばへの(ご本人は略式の軽装でいらっしゃる心積もりが)、浅うはあらず思ひ知られたまへば(親しげなのを思い知りなさったので)、例よりは*見入れて(いつもより気遣って)、御座などひきつくろはせたまふ(姫君は薫君の御座所周りを手厚く整えさせなさいます)。　*「よろしき人」は注に＜普通の身分の人。普通といっても貴族として普通。＞とある。　*「なのめならぬけはひして軽らかにものしたまへる心ばへ」は注に＜薫の姿。並々ならぬ立派な風采でしかも気軽に訪問、その親密さをうかがわせる。＞とある。　*「見入る」はざっと＜注意する＞ということのようだが、ここでは＜気遣う＞だろうか。

墨染ならぬ御火桶(すみぞめならぬおおんひおけ、喪式の黒漆とは違う御火鉢が)、奥なる取り出でて(奥に仕舞ってあったのを取り出して)、塵かき払ひなどするにつけても(ほこりを払って用意するにつけても)、宮の待ち喜びたまひし御けしきなどを(宮様が薫君の来訪を待ち望んでいらっしゃったご様子などを)、人びとも聞こえ出づ(女房たちも話します)。

*対面したまふことをば(御簾内で物越しとはいえ対座して直接お話し申すのは)、つつましくのみ思いたれど(遠慮申したいとばかりお思いだったが)、*思ひ隈なきやうに*人の思ひたまへれば(御簾隔ての取次応対では、あまりに紋切りの世慣れぬように薫君が以前から嫌っていらっしゃったので)、いかがはせむとて(今回は何とか善処しなければと)、聞こえたまふ(姫君は直答応対なさいます)。　*「たいめん」は注に＜『集成』は「直接お話しなさることを」。『完訳』は「この「対面」は、几帳や御簾などを隔てながらも直接会話を交す対座」と注す。＞とある。左様補語する。　*「思ひ隈なし(おもひぐまなし)」は＜考えに隙間が無い＝余裕が無い＞で、考え抜いて＜穴が無い＞のではなく、むしろ型通りのことをこなすことで頭が一杯で＜融通が利かない、相手の気持を思い遣れない＞ということらしい。「隈無し(くまなし)」が＜暗い所が無い→何でも知っている＞なので、この「思ひ隈なし」は紛らわしい語だ。「ぐまなし」に「汲まぬ」との混用があるのではないか、とさえ思う。　*「人の思ひたまへれば」の「人」は敬語遣いもあるし文意から見ても薫君だろう。ただ、妙に分かり難いのは「たまへれば」の「れ」の意味だ。この「れ」は過去の助動詞「り」の已然形だから、「思ひたまへれば」は＜思っていらっしゃったので＞という言い方だ。つまり、今現在の薫君のことではない。そういえば、前回の訪問時にも薫君は「人伝てに聞こえはべるは言の葉も続きはべらず」(三章四段)と取次応対に不満を述べていた。発言明示である。従って、この「思ひたまへれば」は明確に＜以前から思っていらっしゃったので＞を意味するのであり、実際にその「思ひ」の中身は不満表明があったのだから＜以前から嫌っていらっしゃったので＞という言い方と読むべきだ。そして、この文意が以下の文には＜今回は＞という条件項を前置する構文を成すので、「例よりは見入れて」という修辞が副詞語用で「いかがはせむとて」に掛かる文意が成立する。と、こんな風にノートしないと文意が見えてこないとは、やはり執筆時との隔世の感が深いが、それにしても、この当巻の文はあまりにも省語が過ぎるような気はする。ざっと分かり難い。

うちとくとはなけれど(打ち解けた親しさではないが)、さきざきよりはすこし言の葉続けて(前回までよりは少し長い言葉で)、ものなどのたまへるさま(お応えなさる姫君の様子は)、*いとめやすく(とても好感触で)、心恥づかしげなり(遠慮勝ちでした)。　*「いとめやすく心恥づかしげなり」は薫君目線の地文。「目安し」は＜見た目に感じがよい。見苦しくない。また、無難だ。＞と大辞林にある。「心

恥づかし」だと、その「心」は姫（自分が気恥ずかしい）とも薫君（姫が立派だ）とも取れるが、薫君目線での「げなり」という客観視語用は、この「心」が姫君のものだということを示す。

「*かやうにてのみは、え過ぐし果つまじ（このような余所余所しい関係のままでは、終えたくない）」と思ひなりたまふも（と薫君はお思いになりなさるが）、「いと*うちつけなる心かな（全くいい加減なもんだな）。なほ、*移りぬべき世なりけり（やはり興味尽きない男女の仲ということのようだ）」と思ひゐたまへり（と薫君は思っていらっしゃいました）。　*「かやうにてのみは～」は注に＜薫の心中の思い。『完訳』は「結婚を前提とする深い親交を望む」と注す。＞とある。　*「打ち付け」は場当たりの＜軽々しさ＞らしいが、出家願望の薫君にしては、実際に姫を側近くに接すると、八宮の世離れ姿勢に対する敬意などあっさり忘れて、好色心が涌いて来るのは、我ながら呆れもするし、愉しみでもあるのだろう。「心かな」の傍観視からは本気の自制意は感じられない。　*「移る」は＜変わる＞。「移りぬべき世」は＜心変わりしやすい男女の仲＞みたいな言い方のようだが、「心変わり」と言ってしまうと＜移り気＝浮気心＞の意味になってしまうので、此処では＜心が動かされ易い→興味に引かれる男女の仲＞と言って置く。また、「なりけり」は可能推量の助動詞「べし」を受けた推論文型での結論結句なので＜～のようだ＞という言い方。

［第三段　薫、匂宮について語る］

「*宮の、いとあやしく*恨みたまふことのはべるかな（兵部卿宮があなた様方に付いて、また変にご不満に思っていらっしゃることがございます）。　*「宮のいとあやしく」は注に＜以下「痛からめ」まで、薫の詞。「宮」は匂宮をさす。＞とある。話し相手は姉姫なのだろう。であれば、この「宮」は＜兵部卿宮＞と申し上げるのが、姫宮の認識に適う呼称かと思う。　*「うらむ」は、まだ中身を示していないこの時点では相手も対象体も不明で、であれば何かの特定事物に＜反感して憤る＞というよりは、当人の状態として＜嘆き悲しむ＞か＜不満に思う＞くらいのザックリした言い方になっているのだろう。

*あはれなりし御一言をうけたまはりおきしさまなど（八宮がお隠れ後のあなた様方の生計を託しなさった愛情深い御遺言を私がお引き受け申し上げた経緯などを）、*ことのついでにもや（何かの話の序でにでも）、漏らし聞こえたりけむ（私は兵部卿宮に漏らし申したことがあったのかもしれません）。　*「あはれなりし御一言」は注に＜八宮の遺言をさす。＞とある。と言っても、薫君は八宮から正式に遺言を託されたわけでは無い。というか、臨終に立ち会ったのは山寺の阿闍梨であって、薫君は秋口に山荘を訪ねた際に、八宮からおよその意向として、自分の死後の姫たちの見守りを相談されていて、薫君もおよその意向として、その依頼を引き受けて帰宅し、その後の中秋に八宮が急逝したので、結果として姫を見守る立場となり、他に薫君以上の有力な保護者がいなかったので、後見管理者のような役回りとなっている、に過ぎない。のだが、現に物心両面で姫君たちを援助し、お世話申していれば、その圧倒的な権勢を背景に、管理実権者として社会的に認知される、ということらしい。　*「ことのついでにもや」の「や」は疑問意の係助詞で、その解答の一つが「漏らし聞こえたり」なのだが、断定に至らない可能性の話なので推量の助動詞「けむ」で結んでいるようだ。ところで、この場の疑問の主題は＜薫君が姫君たちの管理実権者であるという認識を兵部卿宮は如何にして持つに至ったのか＞であり、その答え自体は＜兵部卿宮は、薫君が八宮に姫君たちの後見を依頼されて引き受けた、と知った又は考えたからだ＞ということまでは、既にこの討論会の出席者たちには共通認識されていて、現下の話題は、兵部卿宮がその答えを知った手段についての論説、であるらしい。

またいと隈なき御心のさがにて(あるいは兵部卿宮はとても聡明な御思索ぶりなので、あなた様方が私の援助をお受け下さっていることから)、推し量りたまふにやはべらむ(故宮が私に後見を託しなされたことを、推し量りなさったのかも知れません)。

*ここに*なむ(何れにせよ、この私を後見人と見込んで)、『*ともかくも*聞こえさせなすべきと頼むを(姫君に何とかお話し申し上げるようにせよと頼るのを)、つれなき御けしきなるは(姫君が連れない御態度なのは)、もてそこなひ*きこゆるぞ(其処許が取り計らい損ね申しているからだ)』と、たびたび怨じたまへば(と兵部卿宮が度々苦情を申して来なさるので)、心よりほかなることと思うたまふれど(私の考えで申すのではございませんが)、里のしるべ(此方の山荘への案内役を)、いとこよなうもえあらがひきこえぬを(私も兵部卿宮には、そう無下にもお断り申せませんものを)、*何かは、いと*さしももてなしきこえたまはむ(あなた様方はどうして、またそのようにお返事も申し上げ為さらないでいらっしゃるのでしょう)。 *「ここ」は会話に於いて話者自身を示す代名詞とは、即ち＜私＞。また、上の仮定思考文では可能性を示しただけで終わっていて、その問題が主疑問に付随した属問題である事を示し、その結論が主話題の方向性に影響しない事を確認出来たとした上での、此処の話の運びのようなので、その話者の意図を示す＜何れにせよ＞という副詞語用の前置句を補語する。 *「なむ」は＜～なるものとして認識する＞という特定の単一事項についての定義を示す言い方で、此処では「ともかくも聞こえさせなすべき、なむ」という構文に於いて、「なむ」を前倒置することで強調意を待たせた文型になっているようだ。そして、その定義認識は兵部卿宮が成したものであり、その定義は＜薫君を姫君の後見人と見做す＞という前提に基づく認識。 *「ともかくも」は、以下「もてそこなひきこゆるぞ」までが兵部卿宮自身の発言文と見做すべき、かと思う。左様に引用括弧校訂する。ので、現在発言者である薫君からすれば、面前の＜あなた＞と二人称で称すべき姫君を、言い換え文では＜姫君＞という固有名詞で示す。尤も、本文では初めから省語されているし、会話文であれば実際の現場でも、むしろ省語しないと話意を損ないかねないことが多いとも思うが、此処では文意の紛らわしさを避ける為に敢えて明示する。 *「聞こえさす」の「さす」は使役だが、それは聞く側の許しなので、「聞こえさす」は元の発言者である兵部卿宮の姫に対する謙譲の＜お話し申し上げる＞という言い方。「なすべし」の「なす」は＜そのようにする＞で、「べし」は匂宮の薫君に対する行動命令。 *「きこゆるぞ」の「ぞ」は理由説明の係助詞で下に「なる」が省略されている、のだろう。「きこゆればこそなれ」という他人事のような言い方に比して、如何にも聞き手を責める語気の強さがある言い方だ。 *「何かは」は疑問形の言い方で遠回しの表現ながら、意図は反語。かといって、是が強ち慇懃無礼な態度とも思えない。というのは、薫君は「心よりほかなることと思うたまふれど」とは言っていたが、薫君自身も姫の引込み思案を世慣れぬ所為だけとは思っていない節があり、自分に対してあまりに余所余所しいのは、もしかすると姫は出生に付いての不義を知っていて、卑しんで避けているのではないか、と不安を覚えているのであり、兵部卿宮に対しての姫の遠慮深さの理由が分かれば、姫の考え方が知れる一助になる、とは薫君自身の事情からも思っていたとすれば、この「何かは」には少なからず本当の疑問意も含まれているようにも見える、からだ。つまり、朝廷のド真ん中にいる匂宮や薫君には、世慣れぬといってもホドがあるのであり、山里暮らしの切ない姫の心情などは到底思いも寄らないものだった、ということではあるらしい。ただ、それでも、あくまでも是は薫君が「心よりほかなることと思うたまふれど」と断った上での、兵部卿宮の代弁なのだから、反語が主文意である事に変わりはないだろう。 *「さしも」の「さ」は「つれなき御けしきなる」を指す。

*好いたまへるやうに(兵部卿宮は風流人でいらっしゃるように)、人は聞こえなすべかめれど(世間では申し做しているようですが)、心の底あやしく深うおはする宮なり(芯は珍しいほど思慮深いお方です)。 *「好いたまへる」は＜好色でいらっしゃる＞と訳文がある。そして、その「好色」は＜女好き＞のことに違いない。だから、「好色だ」は＜浮気者だ。遊び人だ。＞といっているように聞こえる。が、「遊び人」

は意味が広いので焦点がぼけるし、「浮気者」は焦点が違う気もする。先ず、考えて置かなければならないのは、「女好き」といっても、男の性衝動は生理的には、旺盛な繁殖力を担保するためか精子精液を作り続ける機構となっていて、とはいえ特定の発情期が無しに年中交尾するのはヒトだけらしいが、性器接触による個体間の関係形成ということでは、類人猿のボノボの性行動は有名らしく、私もだいぶ前にＴＶ番組でその生態観察記録を見た記憶があるが、性器接触に伴う快感物質の分泌作用をボノボが社会形成に利用しているとすれば、その変型がヒトの性行動かも知れず、だとすればヒトの性欲は繁殖力よりは社会形成に根源的意味があることになるが、何れ、その強い排泄欲求があるためか、充実感のある射精を得るために好奇心を逞しくするように設計されている面があり、それが社会発展に大きな可能性を持つ面もあるが、当面の排泄欲求が強いために、全体の処理を上手く整合出来ない場合が多く、そうした生理的な性処理を強制刺激で済ませる場合も多い。それが、貴人にあっては、召人という専門の女房の役割であり、以下身分相応の商売女が相手を勤めることとなっており、その場合にも情緒は不可欠な要素ではあるが、其処での風情は二次的なことではあるだろう。また確かに、「好色」は必ず情交を伴う人間関係であり、その肌が合うかどうかに左右されるという、他の比較的に関係原理が客観的基準に拠るものとは違って、相当程度に当事者の主観に判断基準が委ねられる、という非常に変化に富み、且つ根源的な個体存在に関わる関係性を意味しているが、それだけに、「好色」という語が性処理自体を示すものではないことには留意したい。で、情交が主たる要素であるとは思いつつも、この「好く」はあえて＜風流人だ＞と読んで置く。で、風流は正に、その時の気分任せで如何にも頼りなく、それが浮気性にも通じるし、責任感の薄さなどにも通じるのだろうが、それは「風流」という言葉に含まれる要素として、特には明示しないで良いだろう。

*なほざりごとなどのたまふ*わたりの(兵部卿宮は冗談で口説きなさる相手の女たちで)、心軽うてなびきやすなるなどを(気安く応じてくる者などを)、めづらしからぬものに*思ひおとしたまふにや(敬うべき相手ではないと軽蔑なさることもあるかもしれない)、となむ聞くこともはべる(とのように聞くこともございます)。　*「なほざりごとなどのたまふ」は、渋谷訳文に＜軽い冗談などをおっしゃる＞とあり、与謝野訳文に＜遊戯的に手紙をおやりになる＞とある。先ず、「のたまふ」だが、是は手紙を遣る場合よりは実際に、相手に直接ではないにしても、言葉を口にして言うことが多いように思う。次に、「なほざりごと」だが、「なほざり」は＜きちんとすべきことを手を抜いていいかげんにするさまをいう。＞と大辞泉に用法解説があり、「なほざりごと」は＜いいかげんな言葉→その場限りの座興＞であり、それはつまり＜遊戯的＞な＜軽い冗談＞でもありそうだが、公の儀式で様式美による格式を示すことが主目的である場合を除けば、個人の日常生活に於いては＜座興＞こそに愉しみの真髄があり、全ての人間関係の構築が其処から始まるものであってみれば、「遊戯」も「冗談」も実は真に受けるべきものであり、悪意を持って危害を加えるべく騙そうとしているかどうかにこそは注意しなければならないが、相手の身分や身元が分かっていれば、むしろ相応に応対できるかどうかに、その者の資質が問われるという真剣勝負の場面の遣り取りでさえある。具体的には、男が女に、あるいは女が男に、ちょっとした褒め言葉を言って、あるいは見つめて好意を伝えて、交際を誘いかける、あるいは誘いかけさせることになるわけで、最初は誰が誰に対しても＜場当たりの口説き文句＞から始める他は無いのだが、そういう事を含めて「冗談」という語は語用されているかと、渋谷訳文に従う。　*「わたり」は此処では相手の＜女たち＞を指すが、「辺り」の漢字表記からは＜その周辺＞と曖昧に何かを指し示す語用が多いように思う。が、「わ(和)」は親しみを持って人を指し示す語感で、場合によっては＜自分＞であり＜あなた＞であり＜彼、彼女＞であり、此処では不特定の誰かを示す接頭語で、「たり」は複数人をいう言い方だとすれば、「わたり」は＜不特定の数人＞という意味が原義で、その語感の曖昧さが一般に＜周辺＞を示す意味に転用されたのかも知れない。などと、符と思った。　*「思ひおとす」は＜見下す、軽蔑する、軽んじる＞とのことだが、是を姫君たちがどう聞くのかも気懸かりだが、私が聞く限りでも実に不愉快だ。確かに、尻軽女をまともに正妻に置くべきと考えるのは的外れかも知れないが、単にその場の盛

り上げとして戯れ言で口説いたのなら、それに応じて色気を見せる相手には其也の応対を再び返してこその風流人だろうに、こともあろうに軽蔑するなどというのは、全く以て風上にも置けない。いや、是はものの言い方で、薫君の真意も匂宮が根性悪だと言いたいわけではなく、むしろ見境無く女を追い回す浮気者ではなく、真心のある人物だと言っているのだろうし、姫君たちにも酒場の飯盛り女とは違う貴女と自覚して返事するようにということなのだろうが、尤も貴人相手の采女も貴女ではあったようだが、そも飯盛り女の生活感など姫が知る由も無さそうではあり、であれば尚更に「思ひおとす」は引っ掛かる語感だ。なお、「にや」は＜あるいはそのようであるのかも知れない＞という不確かな可能性を示す係助詞で、下に＜あらむ＞あたりが省かれているのだろう。が、こういう言い方は不確かさが問題なのではなく、不確かであろうとその可能性がある事自体が問題だという意味で、遠回しに人を制する意図を持って語用される。

*何ごとにもあるに従ひて（従って兵部卿宮のお手紙は本気の縁談伺いなのでして、結婚というものを考えてみまするに、何ごともあるがままに）、心を立つる方もなく（興奮せずに）、*おどけたる人こそ（のんびり構えている女の方が）、ただ世のもてなしに従ひて（ただ成り行きに任せて）、とあるもかかるもなのめに見なし（何に対しても大したことではないと考えて）、すこし心に違ふふしあるにも（少し気に入らないことがあっても）、*いかがはせむ（自分に何が出来るものでもない）、*さるべきぞ（そうなる廻り合わせだったのだ）、なども思ひなすべかめれば（などと思い込むようなので）、*なかなか心長き例になるやうもあり（男の不実で夫婦仲に波風が立っても、意外に長続きする例になるようなこともあります）。　*「何ごとも」以下は、一般論としての結婚の成功例を引き合いに出して、兵部卿宮に対する姫君たちの取るべき応対方法を諭しているようだが、であれば、直前まで匂宮の人となりを話して来たことに、直接続けて夫婦論を話し出すのは如何にも唐突で、実際の会話では間や抑揚などで話題転換を示せるかも知れないが、文面に於いては、例えば地文で間を補うとか、現代語で多用する副詞語用の前置詞や接続詞で上文との繋がりや切断を示す何らかの補語をすると共に、話題が夫婦論一般に移っていることを明示せずには、とても文意を示せない。　*「おどく」は＜戯ける＞ではなく、「おほどく」の音便らしく＜おっとりしている＞ということらしい。　*「いかがはせむ」は反語表現で＜どうしたものか、どうにもならない＞という言い方、と古語辞典にある。　*「さるべきぞ」の「ぞ」は反論を押さえ込む、この場合なら自分の不満を抑える、念押しの係助詞で、下に＜あらむ＞が省かれている。　*「なかなか」はこの場合は＜その傾向の直線的な予測に半ば反して＝思いの他に＞くらいの言い方かと思うが、「その傾向」とは此処では文意から察して＜男の浮気で夫婦仲が破綻する＞という事態推移の方向性だ、と当会議出席者には共通認識されているらしい。

*崩れそめては（夫婦仲が壊れ出したのでは）、*龍田の川の濁る名をも汚し（龍田の見事な紅葉にも例えられる、良家の女主人という地位を激怒で失い名声までも汚し）、いふかひなく名残なきやうなることなども（取り返しのつかない空しい人生になることなども）、皆*うちまじるめれ（全て含まれてしまうでしょう）。　*「崩れそめては」は夫婦仲が崩壊した場合の話のようだが、どうやら薫君は、それが専ら女の悲劇で、女の忍耐によって防げる、と説いているようで、こういう話を女の立場で聞かされて先ず思うのは、結婚しなければ悲劇は避けられそうだ、という感想なのではないだろうか。　*「龍田の川の濁る」は注に＜『源氏釈』は「神奈備の三室の岸や崩るらむ龍田の川の水の濁れる」（拾遺集物名、三八九、高向草春）を指摘。＞とある。「神奈備（かんなび）」は＜神霊の鎮座する山や森。＞と古語辞典にあり、「神奈備の」は＜神聖なる＞という言い方らしい。「千早振る（ちはやぶる、霊験あらたかな→神聖なる）」と似たような言い方だろうか。と、そんなことを思うのも、竜田川と言えば、「ちはやふる（千早振る）かみよもきかず（神代も聞かず）たつたがは（龍田川）からくれなゐに（唐紅に）みずくくるとは（水括るとは）」、という百人一首 17 番の歌が想起されるからだ。というのはウソで、どうも落語噺が耳に残っていたらしい。で、竜田川が大関の四股名ではなく、奈良県生駒郡斑鳩町の

法隆寺の西を流れる川の名で、その竜田川が南下して大和川に合流する地点の西側に標高 82mの三室山という丘がある事も地図で確認できた。ただ、「千早振る～」の歌は古今集 294 番の在原業平の歌であるらしく、単に川面を紅葉が赤く染めた見事さを歌った情景詠みでは収まらないようでもあるが、今は其処には立ち入らない。ただ、それだけに、拾遺集の参照歌も到底、嵐の情景詠みに終わっているなどとは思えないが、此処にも立ち入らない。ただ、歌の龍田川は今の大和川で、三室岸が崩れて流れ込んだのは今の平群川に当たるらしい。しかし、此処で「龍田の川」を引き合いに出した作者の意図は＜竜田川流域＝竜田山=龍田姫＞という連想で＜龍田姫＝織染の女神＝妻＞と例えて、「龍田の川の濁る名」という言い方で＜女主人の名声を一時の激高で失う＞愚かさを、因果を含めるように姫に諭している薫君を描こうとしたのだろう。　*「うちまじるめれ」は注に＜係助詞「こそ」はないが、文末、已然形。＞とある。文意からすれば、下に省かれた文は＜(めれば)あはれならむ＞あたりだろうか。已然形は文節が条件項を示す言い方となる語尾変化ということらしいが、ということは、論理推定を導く文意における語用となるわけで、言い換えとしては＜～だろう、～かもしれない＞という推察意で表わすべきなのだろう。尤も、助動詞「めり」が推量意を示しているようでもあるが、「めり」は論理推定の言い方ではなく、事実の不確かさを言う＜ように見える＞という言い方なので、此処での「めり」は推量表現ではなく婉曲表現であり、是を終止形で言うなら「うちまじるめり」ではなく「うちまじるめるらむ」だ。また、その推論が当然意であったり、可能意であったりする違いによって、説得や願望や感想などの文意を示すのだろう。

*心の深うしみたまふべかめる御心ざまにかなひ(兵部卿宮は心に深く感じなさるに違いない筈の真心に沿って)、ことに背くこと多くなどものしたまはざらむをば(特にそれに反することが多くいらっしゃらない女君については)、さらに、軽々しく(決して軽々しく)、初め終り違ふやうなることなど(心変わりなさるようなことは)、見せたまふまじきけしきになむ(お見せにならないという印象でございます)。　*「心の深うしみたまふべかめる」の主語は敬語表現からして兵部卿宮だろうが、此処で、上の一般論を受けて、姫が実際に匂宮に大して接すべき態度を示唆することになるらしい。「べかめり」は、当然意の助動詞「べし(～に違いない)」の連体形「べかる」に、他意推量の助動詞「めり(～の筈だ)」が付いた「べかるめり(～に違いない筈だ)」の音便。

人の見たてまつり知らぬことを(私は余人が兵部卿宮についてお知り申し上げないことまでを)、いとよう見きこえたるを(とても良く見知り申して、懇意にさせて頂いておりますので)、もし似つかはしく(もしもあなた様がこの縁談を分相応で)、さもやと思し寄らば(それも良かろうとお考えなら)、そのもてなしなどは(その取次などは)、心の限り尽くして仕うまつりなむかし(誠心誠意お勤め申し上げる所存です)。御中道のほど、乱り脚こそ*痛からめ(御取持ちの労は厭いません)」　*「痛からめ」は下に＜ど、厭いもせず＞あたりが省かれているのだろう。

と(と薫中納言殿が)、いとまめやかにて(とても実直に)、言ひ続けたまへば(説得申しなさったので)、わが御みづからのこととは思しもかけず(姉姫は御自身の縁談とは思いも寄りなさらず)、「人の親めきていらへむかし(妹君の親代わりとして受諾申そうか)」と思しめぐらしたまへど(と思い巡らしなさるが)、なほ言ふべき言の葉もなき心地して(それでもどう答えて良いか分からずに)、

「いかにとかは(今が今如何とは、お答え致しかねます)。かけかけしげにのたまひ続くるに(随分いろいろとご心配頂いたようで)、なかなか聞こえむこともおぼえはべらで(簡単にお返事も思い付きません)」

と、うち笑ひたまへるも(と、愛想笑いなさるのも)、おいらかなるものから(穏やかな物腰なので)、*けはひをかしう聞こゆ(良い雰囲気です)。　*「けはひをかしう聞こゆ」は薫君目線ではありそうだが、「気延ひ」が伝わるという言い方は地文語りなのだろう。

[第四段　薫と大君、和歌を詠み交す]

「*かならず御みづから聞こしめし負ふべきこととも思うたまへず(いえ何も、絶対にあなたが御返事申しなさる役を負っていらっしゃるだろうとは私は思っておりません)。　*「かならず」は<他の可能性が無しに＝絶対に>。薫君は姫の態度に付け入る隙を見たのだろう。今が責め時と畳み掛ける、みたいな。だから、言葉尻に付け込む<いえ、何もそれは>などの応対句は欲しい。

*それは(あなたは)、雪を踏み分けて参り来たる心ざしばかりを(雪を踏み分けて参り来た私の善意だけを)、御覧じ分かむ*御このかみ心にても過ぐさせたまひてよかし(お汲み取り頂ける御姉上の御腹積もりにさえして置いて下されば結構です)。　*「それ」は、此処では上文の話題を受けた指示語ではなく、強いて言えば「御みづから」を受けているともいえるが、そう混み入って考えるまでもなく、話し相手に直接<あなた>と呼びかけた代名詞と見て良さそうだ。 *「おおんこのかみごころ」はイヤラシイ言い方だ。「御兄心＝年長者らしい気持」というこの語の意味するところは<保護者責任＝社会性を備えた管理者としての礼儀を守る心構え>であり、それは世慣れない姫君にとっての弱みであり、且つ姉君にとってはその責を負わねばならない自覚から、無理を圧してでも体裁を繕わねばならない重圧感に曝されるもので、権威者である薫君の実に絶妙な責め所である。

かの御心寄せは(兵部卿宮の御関心は)、また異にぞはべべかめる(もう一人の御方の方にあるようです)。ほのかにのたまふさまもはべめりしを(少しそれらしい事を兵部卿宮が私に仰ったようですが)、いさや(いえとても)、それも人の分ききこえがたきことなり(それは他人の私に誰がお書きになったのか分かる筈もございません)。御返りなどは、いづ方にかは聞こえたまふ(お返事は何方がお書きになったのですか)」

と問ひ申したまふに(と中納言が問い申しなさると)、「ようぞ(良くも)、戯れにも聞こえざりける(戯れ言にしても私が返事など申し上げないでいたものだ)。何となけれど(返事をする事自体は当人同士の仲にあっては、どうということはないが)、かうのたまふにも(他人が面と向かってこう仰るのでは)、いかに恥づかしう胸つぶれまし(もし自分が書いていたら傍目に気後れして、どれほど恥ずかしく傷付いたことだろう)」と思ふに、え答へやりたまはず(と思うと姉姫はとても答えることがお出来になりません)。

「雪深き山のかけはし、君ならでまたふみかよふ跡を見ぬかな」(和歌 46-15)

「君ならで 山のかけはし 雪深し」(意訳 46-15)

*注に<「文」と「踏み」の掛詞。大君の詠歌。あなた薫以外とは文を交わしたことはない、という。>とある。それにしても、「やまのかけはし」とは、「かけぢ」「かけみち」に続いて、またも「かけ」の語用であり、末摘の「からごろも」みたいな一点張りを思わせる。王家の格式を守る自負という点では、確かに共通項もある二人なわけだが、さすがに末摘の強烈さはもう敬遠したい。また実際、姉姫の歌詠みは断然気が利いている。

と書きて(と姉姫は書いて)、さし出でたまへれば(中納言に差し出しなさると)、

「御ものあらがひこそ、なかなか心おかれはべりぬべけれ(お隠し立ては却って気になります)」とて(と薫中納言は言って)、

「つららとぢ駒ふみしだく山川を、しるべしがてらまづや渡らむ　(和歌 46-16)

「道しるべ 先ずふみしだく 駒渡り　(意訳 46-16)

*注に＜薫の返歌。「ふみ」の語句を用いて返す。わたしのほうが先にあなたと契りを結びたい、の意。＞とある。「つららとづ」は＜しっかりと連なり続く＞で、一意は＜隊列を組む＞であり、もう一意は＜氷が張る＞となるらしい。「こまふみしだく」は＜馬で踏み砕きながら進む＞。「しるべしがてらまづや渡らむ」は＜案内役を勤めながら私が先に一線を越えましょう＞。

さらばしも(そうなれば決して)、*影さへ見ゆるしるしも(こうしてお会いして御相談できたのも)、浅うははべらじ(浅い縁ではないでしょう)」　*「影さへ見ゆるしるしも」は注に＜歌に添えた詞。『源氏釈』は「浅香山影さへ見ゆる山の井の浅きは人を思ふものかは」（古今六帖二、山の井）を指摘。＞とある。この引き歌は古今集の仮名序に手習歌の代表例のように掲げられているらしいが、子供が面白味を覚えるとすれば、「浅か山」と「浅きは人を思ふものかは」の逆説っぽい所だろうか。でも、言葉を追うと意外に分かり難い歌で、多分これは絵柄として子供たちには説明したんだろうな、と思う。即ち、「浅香山影さへ見ゆる山の井の」は＜山影さえ映る山の池の清澄を見れば＞で、「浅きは人を思ふものかは」は＜どうして薄情でいられようか＞と、恋人の美しさと自分の真心を詠んでいる、のだろう。となると、此処の「影さへ見ゆる」は、薫君が山荘を訪れたこととも、姫が姿を現したこととも、どちらにも取れそうで、であれば無難に＜二人が会えたこと＞として置きたい。「しるしも浅うははべらじ」は具体的な話には聞こえず、良く分からない言い方だが、筋は＜実現したのは浅くない証拠だろう＞みたいなことかと思い、その浅くないものとは＜縁＞かと当ててみた。

と聞こえたまへば(と中納言が申しなさると)、*思はずに(意外な薫君の自分への言い寄りに)、ものしうなりて(姫は嫌気して)、ことにいらへたまはず(何もお応えなさいません)。　*「思はずにものしうなりて」は注に＜主語は大君。以外な薫の懸想に不愉快になる。＞とある。

けざやかに(はっきりと)、いともの遠くすくみたるさまには見えたまはねど(余所余所しく強張った様子ではいらっしゃらないが)、今やうの若人たちのやうに(都の若い女たちのようには)、艶げにももてなさで(気取った風もなく)、いとめやすく(とても安心できる)、のどかなる心ばへならむとぞ(穏やかな性格なのだろうと)、推し量られたまふ人の御けはひなる(中納言は推し量りなさる姉君の御様子です)。

かうこそは、あらまほしけれと(是は理想的だと)、思ふに違はぬ心地したまふ(薫君は期待通りに御思いなさいます)。ことに触れて、けしきばみ寄るも(何かにつけて誘い掛けてみても)、知らず顔なるさまにのみもてなしたまへば(姫は気付かない振りをしていらっしゃるので)、心恥づかしうて(薫君は気まずくなって)、昔物語などをぞ(八宮の思い出話などを)、ものまめやかに聞こえたまふ(神妙そうに申しなさいます)。

［第五段　薫、人びとを励まして帰京］

「*暮れ果てなば（遅くなると）、雪いとど空も閉ぢぬべうはべり（雪がますます空まで塞いでしまいそうです）」　*「暮れ果てなば」は普通なら＜日が落ちると＞だろうが、雪がますますひどくなりそうだ、ということは、既に今現在も降っているということなので、であれば雪曇りであって、この「くれ」は＜暗くなる＞であり、「くれ果つ」は＜すっかり暗くなる→時間が遅れる＞という言い方なのだろう。

と、御供の人びと声づくれば（と御供の人々が帰京を促し申すので）、帰りたまひなむとて（中納言殿はお帰りになることとなって）、

「心苦しう見めぐらさるる御住まひのさまなりや（宮様がいらっしゃらなくては、頼りなく見回される此方でのお暮らしぶりです）。

*ただ山里のやうにいと静かなる所の（あちらの私の家は、ちょうどこちらの山荘のようにとても静かな所で）、人も行き交じらぬはべるを（人の出入りもありませんので）、*さも思しかけば（あなた方がお移りになる御心算なら）、いかにうれしくはべらむ（どんなに嬉しいことでしょう）」*「ただ」は、条件提示の接続詞（唯、只）ではなく、近いものを示す副詞（直）で＜ちょうど（是と似たような）＞という語用らしい。注には此処の文意を＜京の三条の薫の邸をいう。「交じらぬ」と「はべる」の間に「邸」の語句が省略。＞としてある。であれば、むしろ文頭に主語となる対象を示す＜我が家は＞が省語されていることになり、話題対象が変わる事を示す肝心要の語を省くという神経は、私には本当に理解できない。此処の現場では「帰りたまひなむとて」に関わる幾つかの話題が出ていて、この文の主語が当事者たちには＜三条邸＞である事が承知されていたとするなら、その背景描写は必須だ。これは古文の分かり難さではなく、作者の説明不足だ。　*「さも思しかけば」は注に＜京の邸に移ることに同意されたら。＞とある。

などのたまふも（など仰るのにも）、「いとめでたかるべきことかな（大変結構なお話しですね）」と、片耳に聞きて、うち笑む女ばらのあるを（と小耳に挟んで嬉しがる女房たちがいるのを）、中の宮は（妹姫は）、「いと見苦しう（何とはしたない）、いかに*さやうにはあるべきぞ（どうしてそのように軽々に上京して父宮の訓えに背くことが出来ようか）」と見聞きゐたまへり（とこの場の遣り取りを御覧になっていらっしゃいました）。　*「さやうには」の「さやう」は＜そのように上京すること＞だろうが、「には」の念押しには特別な思いが込められていそうだ。それは多分、八宮が山籠もりの直前に姫君たちに「おぼろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな」（二章四段）と言っていたことが遺言となってしまったので、未だ中納言を「おぼろけのよすがならず」と思っている中姫には、上京は父の遺言に背くことになってしまう、ということなのだろう。

*御くだものよしあるさまにて参り（中納言殿への土産物に冬の宇治ならではの特産果実を差し上げ）、御供の人びとにも、肴などめやすきほどにて（御供の人びとにも料理を見繕って振舞い）、土器さし出でさせたまひけり（姫君は家人に別れ盃の酌をさせなさいました）。　*「おおんくだもの」は果実か菓子か良く分からないが、「よしあるさま」が＜宇治らしい土産物＞なら果物で、当時なら栗とか干し柿あたりらしい。

また（また一方で中納言殿の方でも）、*御移り香もて騒がれし*宿直人ぞ（昨秋の訪問時に下げ渡した狩衣の御移り香で周囲から冷やかされた門番の）、*鬘鬚とかいふつらつき（かつらヒゲと

かいう顔つきが)、*心づきなくてある(むさ苦しく見える者を)、「*はかなの御頼もし人や(見掛け倒しの番人だな)」と見たまひて(と親近感をお持ちになって)、召し出でたり(お呼び出しなさいました)。　*「おおんうつりが」については、昨年の晩秋の訪問時に薫中将が門番に下げ渡した狩衣が、橋姫巻三章八段に「宿直人が、御脱ぎ捨ての、艶にいみじき狩の御衣ども、えならぬ白き綾の御衣の、なよなよといひ知らず匂へるを、移し着て、身をはた、え変へぬものなれば、似つかはしからぬ袖の香を、人ごとにとがめられ、めでらるるなむ、なかなか所狭かりける」と書かれていた。　*「とのゐびとぞ」の係助詞「ぞ」は「心づきなくてある」に説明意で係るので、現代語文では＜(宿直人)が(心づきなくてある)のを＞という並行文の言い方となる。　*「鬘鬚(かづらひげ)」は＜あご髭をつる草のように長く伸ばしたヒゲ＞らしい。　*「心付き無し」は＜気に入らない。意に満たない。不愉快だ。＞と大辞林にある。顔が不愉快だ、ということの此処での意味は、見た目が悪い→見苦しい→むさ苦しい、みたいなことだろう。　*「はかなの御頼もし人や」は＜頼りない姫の護衛だ＞という愚弄で、今は特に見た目を話題にしているので、その文脈で言えば＜見掛け倒しの関守だな＞くらいの言い方なのだろう。だが、これは罵倒ではなく、自分の侵入を防げなかったからだ、という冗句であって、実意は庭先まで案内してくれた男気に親しみを感じての軽口なのだろうが、殿居人にしてみれば、薫君が主人の八宮と懇意であり、当時でさえ近衛の中将という高官であったればこその計らいであって、正に人を見て通行を管理するという門番としての役目を果たしていたのであり、またそれだけのことではあったのだが、それさえも今の薫中納言には愛しく思えるほどの今日の上首尾だった、という文意なのだろう。

「いかにぞ(どんな調子かな)。おはしまさでのち(八宮がお亡くなりに成ってからは)、心細からむな(心細いんだろうね)」

など問ひたまふ(と中納言はお尋ねになります)。うちひそみつつ、心弱げに泣く(門番は眉をひそめて気弱そうに泣きます)。

「世の中に頼むよるべもはべらぬ身にて(私は他に頼る身寄りも無い身でして)、一所の御蔭に隠れて(宮様お一人の御蔭を持ちまして)、三十余年を過ぐしはべりにければ(三十年以上お仕え申してまいりましたので)、今はまして、野山にまじりはべらむも(今はもう流浪の身と成りましたら)、いかなる木のもとをかは頼むべくはべらむ(寄るべき大樹の陰もございません)」

と申して、いとど人悪ろげなり(と申して、ますます見る影もありません)。

おはしまししし方開けさせたまへれば(薫中納言はこの門番に八宮がお住まいだった部屋を明けさせなさると)、塵いたう積もりて(埃がだいぶ積もっていて)、*仏のみぞ花の飾り衰へず(仏壇にだけは花が新しく供えられていたが)、行ひたまひけりと見ゆる御床など取りやりて(宮が念仏を上げていらっしゃったと思われる床畳などは取り外して)、かき払ひたり(片付けられていました)。　*「ほとけ」は仏像というより、小さな仏像と位牌を祀った仏壇かと思う。三章七段に、追善供養を上げていた山寺の僧が「仏は皆かの寺に移したてまつりてむとす」と言っていたので、むしろ目ぼしい仏像は山寺に安置されていたように思う。

*本意をも遂げば(自分が出家した時には)、と契りきこえしこと思ひ出でて(と薫君は八宮に次のように約束申し上げていたことを思い出して)、　*「本意をも遂げば」は注に＜自分薫が出家した暁には、の意。＞とある。この「遂げば」の係助詞「ば」は、「遂ぐ(成し遂げる)」の已然形に付いているので＜～の場合に

は＞の意味で、下の歌の「立ち寄らむ(蔭と頼みし椎が本)」に掛かっているが、此処ではあえて述辞を省いて、興味を引っ張る演出となっている。

「立ち寄らむ蔭と頼みし椎が本、空しき床になりにけるかな」（和歌 46-17）

「いつか頼んだ椎が本、されどころころどぶりんこ」（意訳 46-17）

*注に＜薫の詠歌。『異本紫明抄』は「優婆塞が行ふ山の椎が本あなそばそばし床にしあらねば」（宇津保物語、嵯峨院）を指摘。＞とある。この下敷き歌は橋姫巻二章四段に、八宮の修行者ぶりを「宮の御ありさまのいとあはれなるを、ねむごろにとぶらひきこえたまひ、たびたび参りたまひつつ、思ひしやうに、優婆塞ながら行ふ山の深き心、法文など、わざとさかしげにはあらで、いとよくのたまひ知らす」と語られていた文に於いても、「優婆塞ながら行ふ山の深き心」という言い回しにも引かれていた。其処の考察ノートにも記したが、この引き歌は「うつほ物語」の当該場面に於いて、神前に奉る歌の一つとして紹介されていて、神楽に仏僧の取り合わせからして、滑稽歌の趣きだ。「優婆塞(うばそく)」は＜在家仏道者＞のことで、即ち八宮を指し、八宮を＜優婆塞の宮＞と便宜呼称することもあるらしいが、「優婆塞ながら行ふ」と言う時の「優婆塞」には＜見習僧＞の語感がある。「行ふ山の椎が本」は＜修行場のドングリの木の下＞。「あな稜稜し床にしあらねば」は＜ドングリの実が痛くて寝床には成らない＞。「あな稜稜し常にしあらねば」は＜読経が下手なのは馴れていないからだ＞。というわけで、「しゐがもと」は優婆塞だった八宮の＜修行場＞であり、それが取り払われていたとは、まるで神楽歌のように「むなしきとこになりにけるかな」という洒落。不真面目というのではないが、少なくも深刻ぶらない淡々とした気分の歌詠み、かと思う。

とて(と詠歌して)、柱に寄りゐたまへるをも(柱に寄り掛かっていらっしゃるのでさえも)、若き人びとは、覗きてめでたてまつる(若女房たちは覗き見て称え申し上げます)。

*日暮れぬれば(日暮れになると)、近き所々に、*御荘など仕うまつる人びとに(従者が此処の近くの数箇所の薫君所領の荘園を管理する者たちに)、*御秣取りにやりける(牛や馬の餌草を持って来させるように言い付けてあったのを)、*君も知りたまはぬに(薫君もご存じなかったのだが)、田舎びたる人びとは、おどろおどろしくひき連れ参りたるを(下働きの村人が大挙して連れ立ってこの山荘に参ったので)、「*あやしう、はしたなきわざかな(何とも大袈裟なことだ)」と御覧ずれど(とお思いになったが)、*老い人に紛らはしたまひつ(薫君は今回の訪問を姫君の伯母筋に当たる老女の見舞だと言い紛らわしなさっていました)。　*「日暮れぬれば」は「田舎びたる人びとは、おどろおどろしくひき連れ参りたる」に繋がる。「近き所々に～君も知りたまはぬに」は挿入句となる構文で、事情説明の補足だ。注には、此処の文意について＜供人が気を利かせて荘園の人々に今夜明朝の馬の飼料を取りにやらせた、それを主人の薫は知らないでいた、という趣。＞とある。本当に分かり難い主語省略で、この注が無ければ、とても文意が取れなかった。　*「御荘(みさう)」は注に＜薫の荘園に仕える人々。＞とある。ただし、この「人びと」は＜管理人たち＞であり、下にある「田舎びたる人びと」は＜下働きの村人たち＞なのだろう。　*「御秣(みまくさ)」は＜中納言殿の馬の飼料＞。尤も、薫君の乗る馬の餌というよりは、薫君所有の馬の餌だから、御一行の牛や馬の餌だ。　*「きみ」は薫君、らしい。　*「あやしうはしたなきわざかな」は注に＜薫の思い。お忍びで来たのが表沙汰になってしまったので具合が悪い思い。＞とある。この文意も難しい。　*「老い人に紛らはしたまひつ」は注に＜弁のもとに用事があって来たかのようにごまかした、の意。＞とある。言われれば、そういう事かと思うが、私には文意が見えなかった。

*おほかたかやうに仕うまつるべく（大体このように姫君たちにお仕え申すようにと）、仰せおきて出でたまひぬ（薫君は荘園管理者たちに申し置いて帰途に着きなさいました）。　*「おほかたかやうに」は注に＜いつもこのように姫君たちのお世話をするようにと、荘園の人々に命じおいた、の意。今まで宿直人一人が世話をしていたのが、急に薫の荘園の大勢の人々も世話をするようになった。＞とある。「日暮れぬれば」以下の文は私にはお手上げだった。注を見て、なるほどと思って、また本文を見ても、普通なら大体は文意が見えてくるものだが、此処の文に関しては、どうも波長が合わない感じで、また呪文に見えてきて、ただただ注記の文意解説に感心する。やはり、是は私の当時の生活様式についての基礎知識不足なのかも知れない。